

令和3年度ティーチングポートフォリオ（簡易版）

森山 洋美（准教授）

1. 教育の責任

私は、食物栄養学科において栄養士過程の人と食べものをつなぐ科目である「応用栄養学（1年前期、栄養士必修科目）」、「応用栄養学実習（1年後期、栄養士必修科目）」、「栄養の指導」「栄養指導論Ⅰ（2年前期、栄養士必修科目）」、「栄養指導論Ⅱ（2年後期、栄養士必修科目）」、「栄養指導論実習（2年後期、栄養士必修科目）」を担当し、ライフステージに応じた栄養アセスメントや栄養教育、栄養指導に関する技法や栄養ケア・プログラムの一連の流れを理解できるように授業をおこなっている。栄養士科目以外では「スタディスキルズⅡ（1年後期、卒業必修科目）」、「特別研究（2年通年、卒業必修科目）」を担当し、調査方法及び研究の流れや進め方、まとめ方に対する助言及び指導を行っている。さらに幼児保育学科保育士専門科目である「子どもの食と栄養Ⅰ（2年前期、保育士必修科目）」、「子どもの食と栄養Ⅱ（2年後期、保育士必修科目）」を担当し、子どもの食や食育について指導を行っている。その他、2年生のクラスアドバイザーとして学生が円滑に学生生活を送ることができるよう履修指導や学生生活の他、進路についての支援を行っている。

2. 教育の理念と目標

私の教育理念と目標は専門職として必要な知識や技術を習得し、それらを実践で活かすことができる「応用力」を身につけた人材の育成することである。また授業を通して栄養士という専門職の意義や使命について理解を深めてもらいたいと思っている。あわせて学生には栄養士としての本学の教育理念である「価値の多様性を理解する豊かな人間性と自立して生きていくために必要な実学を身に着ける」ために積極的に地域や社会にかかわり、新たな知見や情報を収集し活用できるようになってほしい。さらに、栄養士は対象をよく理解し、各個人に沿った栄養サポートや食事提供をすることが望まれる。そのためにも客観的に物事を理解し、その時に最善の支援につながるよう自分の知識と技術を統合し応用できるようにしている。また、栄養士にはコミュニケーションスキルが求められることから、積極的に人と関わり、まわりと協力して物事に組み込む機会を取り入れている。（根拠資料①②）

3. 教育の方法

私が担当する科目は1年前期から2年後期まですべてのセメスターに配置されていることから、他の科目とのつながりや継続した学びを意識できるよう働きかけている。

また、栄養士や保育士として何が求められているのかを知るために、新聞、雑誌、ニュースなどから自分の領域に関する最新の情報や話題を収集し随時レポートを作成させている。教科書以外にも必要に応じて食を取り巻く現状や課題について参考資料として配布している。

実習においては現場で活用できるテーマを設定し、技術と知識を統合し、実践できるようにしている。特に応用栄養学実習では、テーマに沿った献立作成及び調理だけでなく、給食便りなどの媒体作成を行うことで習得した知識を活用できるようにしている。中でも高齢期の栄養については疑似体験を通し、対象の理解を深める他、系列の高齢者施設管理栄養士の先生に授業に参加していただき、現場での調理の仕方やポイントなどを学生に指導いただいている。さらに、今年度は授業内で全学生が系列の施設にうかがい、おやつを提供、喫食状況の見学を行うことで対象

の理解につなげている。他に系列保育施設の栄養士に授業に参加いただくなど、現場での栄養士の仕事を意識できるように心がけている。栄養指導論ではこれまで学んだ専門科目の知識を活用できるよう、ケーススタディを多く取り入れるようにし、授業で学習したことを振り返るとともに、栄養士の実務を意識できるよう工夫している。(根拠資料③④)

4. 評価と成果

応用栄養学については専門知識のベースとなる科目であることを意識して授業を行っている。コロナ禍であることや本学での ICT の促進がされていることから、昨年度から引き続き板書ではなくスライドを用いて授業を進めている。また、毎授業のはじめ振り返りをかえて前回授業の内容に関するクイズを行ったが学生にその目的が浸透していなかったと思われる。次年度はオリエンテーションの際、しっかり周知し復習につげていきたい。52 期生からはテストの形式を変えて行ったためか、例年に比べて低い平均となった。もっとわかりやすい授業や説明が必要だったと思われる。これはレポートについても同様でしっかり理解できるような説明を心がけるべきだった。Office365 を導入してから学生は気軽に質問ができるようになったこともあり、次年度はフォードバックや学生の質問にもっと対応していきたい。今年度も新聞記事を紹介するグループワークを取り入れたが、学生同士で紹介することで主体的に授業に参加している様子が視えた。講義であっても一方向のものでなく、学生が能動的に参加できる内容を組み込みことで、学びが深まると考える。昨年度の TP において応用栄養学では学生が積極的に学ぶことができていたと評価したが、その成果が栄養士実職試験に表れたと考える。これまで、栄養士実力認定試験の「栄養学各論」の成績は毎年短大平均を上回ることができていなかったが、今年度の試験では平均を上回ることができた。次年度も今年度同様しっかり対策していきたい。

応用栄養学実習では指示された条件のもと献立作成、調理、プレゼンテーションを行っている。教員や学生のコメントや調理した実物を確認することで、自身の振り返りや気づきにつながっている。また、介護食や離乳食など様々な食形態を調理・試食することで、対象者に適した食事の必要性や工夫することの大切さに気付く機会となっている。さらに、現場で活躍する管理栄養士及び栄養士（系列高齢者施設及び附属保育施設）の先生に授業に参加していただくことで、より実践的なポイントについて学ぶことができたと考えている。あわせて現場の栄養士の方に直接コメントでいただくことは学生にとっても励みになっている様子が視えた。授業で対象者の理解を深める機会として系列施設に伺い、高齢者の皆様に自分たちが作成したおやつを提供している。残念ながら今年度は新型コロナの影響で代表者だけの訪問となったが、オンラインで中継し、全員喫食の様子を見ることができた。中継ではあったが「おいしい」と感想をいただいたことは現場に伺った学生はもちろん、オンラインで見ていた学生にとって学びが多かったと思われる。実習の課題に「勉強になった」「自分たちが作ったものをおいしいと言ってもらえてうれしかった」などの回答が多くみられた。これまで、グループ内での作業負担の偏りを改善することが課題であったが、今年度から授業時間の中でグループの話し合いをする時間を設け、その場で作業ができるよう試みた。そのために個人課題の期限を早め、グループ課題での話し合いの材料とした。さらに授業時間内で作業が終わらない場合は Teams を活用してグループ作業を行ってもらった。学生にとっては課題が多く大変だったと思われ、授業評価アンケートにおいてもこれまでより学習時間が長くなっている傾向にあった。また、グループによってしっかり打ち合わせができているところとそうでないところの差があり、意欲的な学びに影響したのではないかと思われる。次年度はしっかり話し合いができるようなサポートを検討していきたい。

栄養指導論Ⅰ・Ⅱでは昨年度は学習時間が短く期末試験の結果につながらなかったことから、今年度はケーススタディの他、課題解決に関するテーマを扱った課題を増やし、授業内容の理解を深めるよう試みた。課題の内容も学生らしいユニークなものが多く、期末試験でも前年度に比べ良い成績であった。授業評価アンケートでも「意欲的に受講できた」の項目をはじめ多くの項目が4.8と高い点数だったことから、今年度の学生は授業をしっかりと理解し、意欲的に学んでいたと考える。

栄養指導論実習では少人数のグループを作り、1人1人が主体的に参加できるように工夫した。今年度は栄養指導論Ⅱの講義内容とテーマと連動するようし、学んだことを実践で活用できるようにした。授業で作成した媒体等も大変良い内容であり、これまで学んだ知識や技術を活かすことができていると考える。今年度はフレイル予防の指導媒体として動画づくりも行った。次年度がこの動画を学生の成果物として本学HPに公開できるようにしてしたい。今年度授業のまとめとして全学生によるパネルディスカッションを計画したが、新型コロナウイルス感染症拡大によりオンラインで形式を変えて行った。レポートには各意見に対して自分の考えを述べていたが、実際にディスカッションができていたら、学生にとってはさらにより学びが深まったと予測され実施できなかったことがとても残念であった。

今年度からスタディスキルズⅡを担当することとなった。特別研究に向けての研究の基礎を学ぶ内容としたが授業評価アンケートの結果をみると、課題探求の項目が他の項目より低かった。この授業は主体的に研究課題に取り組むことを目的としている。そのため、今後は学生がもっと興味をもって主体的に授業に参加するための工夫をしていきたい。

(根拠資料④⑤⑥⑦⑧)

今年度はコロナ禍の影響もあり、思うような地域活動ができなかった。今後は制限がある中でも学生が中心となって活動できる食育の方法をはじめ地域活動が活性化できるよう検討していきたい。

5. 今後の目標

- ・応用栄養学や栄養指導論が栄養士としての知識やスキルにどのように役立つのか、なぜ学ぶ必要があるのか、科目間のつながりも含め学生が理解できるようにしたい。
 - ・使用するデータ等の信憑性や妥当性など学生が根拠（エビデンス）の大切さを理解できるようにしたい。
 - ・対象者の特性をより深く理解し、対象者をイメージした食事提供や栄養管理ができるような学生を育成したい
 - ・グループワークにおける公平な評価方法を確立する
 - ・講義であっても学生が主体的に学習できる教授方法を検討する
 - ・課外活動等を活用した学生による食育指導の実践
 - ・栄養士実力試験対策講座の見直し（全科目短大平均以上を目指す）
 - ・栄養士としての使命感や責任感などのプロフェッショナリズムを育んでいく。
- これらの目標を達成していくためにも自身の研鑽に努め、学生に還元できるようにする。

6. その他

- ・より充実した教育を実践できるように情報収集や知見を深めるため、積極的に外部の研修会や学術大会に参加するとともに、研究成果の発表を目指す。

- ・昨年度より実施している学科の食のサークルと連携して学生食育プロジェクトの活動の機会を増やしていききた。
- ・平成 30 年度より取り組んできたフレイル予防講座での実績を基に、他学科、他学部の先生と共同研究を進め、地域高齢者の栄養改善について継続して取り組んでいく。7
- ・ヘルスコミュニケーションを用いた食育活動の展開事業ではこれまでの事業を継続する他、新規事業取り入れ、立案した計画を遂行していきたい。
- ・県内の栄養士・管理栄養士養成校教職員で立ち上げた研究会の活性化と計画している企画を実施して今後につなげていく。

7 根拠資料

- ① シラバス
- ② 学生便覧
- ③ 作成したスライド資料
- ④ レポート課題
- ⑤ 学生の成果物（献立、教材等）
- ⑥ 授業評価アンケート
- ⑦ 栄養士実力試験結果
- ⑧ 成績評価分布等